

日ノ岡堤谷窯跡の発掘

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

山科盆地の北端、天智天皇陵の築かれている丘陵一帯で、飛鳥時代の須恵器窯跡が数基確認されていましたが、そのうちの1基、日ノ岡堤谷窯跡を1995年夏に調査しましたので概要を紹介します。

窯跡は天智天皇陵の西方の丘陵に築かれたもので、保存状態は良好で須恵器も多数出土しました。飛鳥時代の窯跡としては、京都市内で初めての本格的な発掘調査となり、窯の構造や特徴ある須恵器の様相などが明らかになりました。

窯は丘陵斜面の岩盤をトンネル状に掘り抜いて構築された地下式の窰あながまと呼ばれるもので、全長は7mほどあります。製品を焼成する焼成部と薪を焚く燃焼部からなり、窯の下方には焼き損じた製品や炭・焼土などが堆積した灰原はいばら (物原ものばら) が広がります。

窯の焼成部の床面はおよそ23度の傾斜があります。ここは乾燥させた須恵器を並べ置き、焼き上げて完成品とする所です。焼成部の天井は長さ3mあまり残存し、上端では丸く焼けた煙り出しも検出できました。焼成部の床面や壁面は、高熱を受けて固く焼けています。壁面には掘り抜いた際の工具の痕跡(写真2)や、スサ入り粘土で補修した痕跡(写真3)も見られました。

焼成部の下方で傾斜のゆるやか



写真1 窯跡の全景 (東から) 天井を残した状態。



写真2 側壁に残る工具の痕跡

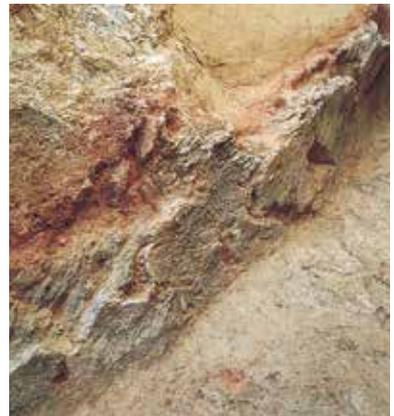


写真3 粘土で補修された箇所

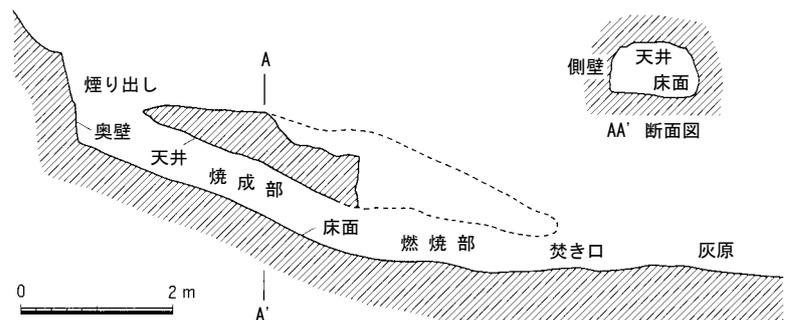


図1 窯跡断面実測図



写真4 コンパス文のある須恵器片



写真5 須恵器片に刻まれた文字

な部分が燃焼部です。ここで薪を焚き、熱を窯内に送ります。燃焼部の床面や壁面は赤く変色した程度で、焼成部ほど高温でなかったことがわかります。薪を焚いた箇所には通常炭や焼土の層が厚く堆積しますが、この窯はあまり厚く堆積した様子は見られません。

須恵器は灰原を中心にして、整理箱で20箱ほど出土しました。杯身・杯蓋が最も多く、他に高杯・短頸壺・脚付長頸壺・甕・甗・提瓶・平瓶・摺鉢・甌などの器形があります。珍しいものでは、鉢の口縁部にミニチュアの高杯や壺をのせた装飾付器台が出土しています。器台の中でもこのような装飾性をもつものは通常、古墳に納められるものです。

そのほか、特記すべき遺物とし

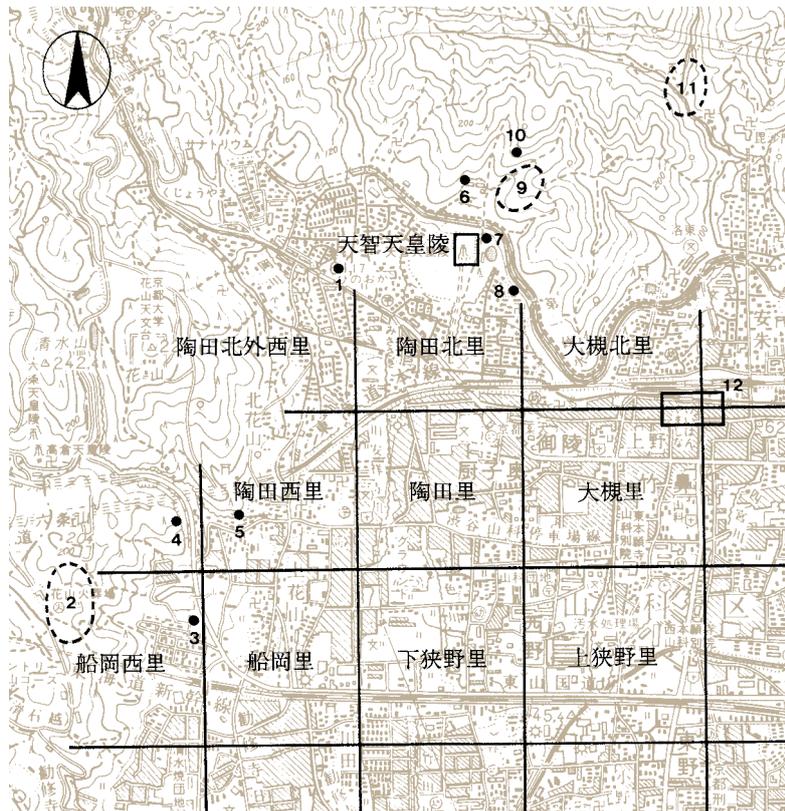


図2 山科盆地北部の主な遺跡と古代条里 (1:30,000) 1日ノ岡塚谷窯跡 2旭山古墳群 3坂尻窯跡 4朝日稲荷窯跡 5大峰窯跡 6大岩窯跡 7天智天皇付近窯跡 8牛尾窯跡 9御陵大岩町遺跡 10大岩古墳 11後山階陵遺跡 12安祥寺下寺下層遺跡 (地図は京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図(縮尺1:30,000)を複製して調整した)

てコンパス文を施したもの(写真4)とへらで文字を刻んだもの(写真5)が出土しています。コンパス文は朝鮮半島の新羅地方で流行する文様で、窯からの出土は初めてです。線刻文字は容器名とみられ、飛鳥時代の数少ない文字資料として貴重です。

今回調査した窯は、床面・壁面に補修の痕跡が少なく、燃焼部の炭層が薄いこと、灰原が小規模で炭層も薄いことなどから、操業は比較的短期間であったと考えられます。今のところ飛鳥時代の中頃、7世紀前半から中頃にかけて操業されたと考えていますが、東には天智天皇陵が築かれていますので、遅くとも天智天皇陵の造営が始まる西暦672年以前には操業を終えていたことは確かでしょう。

また窯跡の周辺に古代の条里地名「陶田里」があることも注意されます。陶田里の「陶」は陶器に由来し、中臣(藤原)鎌足の山科にあった邸宅が「陶原家」と呼ばれていたこととも関連がありそうです。さらに天智天皇陵の北方には製鉄遺跡(御陵大岩町遺跡、後山階陵遺跡)が知られており、飛鳥時代にはこのあたりが一大生産地帯であったとみられます。これらの生産遺跡が中臣氏の活動を支えた経済的基盤であったことは、十分考えられることで、大津宮の造営や天智天皇陵の造営といった古代史上の出来事とも無関係であったとは思われません。飛鳥時代の山背地方の動向を知る上で重要な遺跡として、今後とも注目していく必要があります。(丸川 義広)